

ニューズレター 目次

1	第31回セミナー（鱒ヶ沢）のお知らせ	1-4
2	第30回セミナー（武蔵工業大学）報告	5-7
3	事務局より	7

1 第31回セミナー（鱒ヶ沢）のお知らせ

先にお伝えしたとおり、2005年春の第31回セミナーは、下記の要領により白神山地の麓、青森県鱒ヶ沢（あじがさわ）町で行います。参加申し込みを受け付けますので（期限：5月16日。詳しくは次ページ）、よろしくお願ひします。

【日 時】 2005年6月17日（金）～19日（日）

【場 所】 青森県鱒ヶ沢町 日本海拠点館

【テーマ】 清く正しく美しく？—環境NPOの運動性と事業性—

春秋林道問題や白神山地の入山規制問題で有名になった鱒ヶ沢町ですが、現在は循環型地域づくりの取り組みが盛んです。

2003年にはNPOが事業主体となって風車が立ちました。この事業は市民運動としても新しい展開で、市民からの出資によって建設費が調達されています。また、風車が立っただけではなく、これを見学ツアーや特産品の一坪オーナーなど人やモノの交流へと結びつける事業や、まちづくり基金の創設といった地域の自立につながる活動を展開しつつあります。

白神山地の方でも新たな取り組みが始まっています。地元のNPOによる自然学校、ブナの里親、植林事業、あるいはガイドの養成などの事業展開があります。町行政も近隣の天然林を生かした通過型観光や各種の体験ツアーなど、ローインパクトと経済的収益を両立できるような取り組みを行なっています。

それぞれが、循環型地域づくりの事例として興味深いところですが、現在の状況として、地元の取り組みと地域外のNPOの連携が密になりつつあり、個々の取り組みの乗り入れによる相乗効果が生まれつつあります。

このように、白神山地周辺ではさまざまな取り組みや仕組みが生まれています。その過程では、「環境と経済」の対立が存在しないだけでなく、「敵/味方」、「始まり/終わり」といった区分が存在しません。また「地元/よそ者」という枠組みでの評価も容易ではありません。その一方で、ここで展開されているのは「不純」で「終わりのない」運動だという評価も可能かもしれません。こうした流動的な現実を環境社会学への挑戦と捉え、考える機会にしたいと思います。

■参加申し込み・期限

同封の申し込みハガキ（お手数ですが 50 円切手をお貼りください）、もしくは電子メールにて **5月16日（月曜日）** までにお申し込みください。

電子メールでお申し込みの場合は、申し込みハガキと同様の項目をご記入の上、

seminar@ge-aomori.or.jp

まで送付願います。

■スケジュール（予定）

	6月17日（金）	6月18日（土）	6月19日（日）
午前	11時30分 JR青森駅発 12時 青森空港発 いずれかに集合（昼食はすませておいてください）	9:00～14:00 フィールド探訪 ・白神山地コース ・市民風車コース	9:00～12:00 自由報告発表 終了後解散 （青森空港・JR青森駅までは送迎バスあり）
午後	フィールド探訪（～17:00） ・奥津軽体験コース ・自然学校コース ・熊ノ湯コース いずれかを選択（熊ノ湯コースは18日14時まで）。	14:00～15:30 総会・選挙 15:30～18:30 シンポジウム	
夜	17:00～運営委員会 20:00～各種委員会 【鱒ヶ沢宿泊】	19:00～懇親会 【鱒ヶ沢宿泊】	

■参加費：一般会員 30,000 円程度（学生・院生は 25,000 円程度）

※ JR 青森駅（もしくは青森空港）からの往復バス代、宿泊費 2 泊分、フィールド探訪代、懇親会費、18 日昼食代を含みます。宿泊数、懇親会参加の有無などにより参加費は変わります。上記は全日程参加の場合の参加費です。

■フィールド探訪について

6月17日（金） 11：30（JR 青森駅）／12:30（青森空港）～17:00

「奥津軽体験コース」「白神山地コース」のいずれかを選択可能です。また、オプションとして「熊ノ湯コース（18日14時まで）を選択することも可能です。

・奥津軽体験コース

陸奥湾から峠を越えて津軽藩の新田開発地帯を巡り、太宰治の生家、イタコで有名な川倉地藏尊、中泊博物館、津軽の母「岩木川」下流部のヨシ原とシジミで有名な十三湖、福島城や十三湊など、地域の歴史や暮らしにふれるコースです。郷土史家の佐藤仁氏が案内をします。

・自然学校コース

白神山地のビジターセンターやマザーツリーなど白神の自然にふれるコースです。「岩木山自然学校」を舞台に環境教育活動で地域に貢献する高田敏幸氏による案内です。NPO化までの苦労など、自然学校の経営についての話も聞けると思います（天候によっては岩木山周辺にコース変更する可能性有り）。

・オプション（熊ノ湯コース）

オプション（6月17日午後～6月18日14時）として、「白神自然学校一ツ森校」コースを選択することも可能です。

現役赤石またぎの末裔の吉川氏がオーナーの熊の湯に宿泊します。他では聞くことの出来ない話が飛び

出します。また世界遺産白神山地で活動するNPO白神自然学校一ツ森校の授業や、地元の人達の協力による育林・植林活動を体験できます。18日のフィールド探訪にある白神山地コースをより深く体験できます。

6月18日(土) 9:00～14:00

白神山地コースと市民風車コースに分かれて実施します。両コースともに、自然学校と市民風車は組み込まれていますが、主要な見学ポイントが異なります。

・白神山地コース

世界自然遺産の白神山地の麓で活動する白神自然学校一ツ森校で、地元の人のご協力を頂きながら、昔と今の白神やNPOと地元の関係などを見学していただきます。また、昼食は地元の方が白神の食材で作った白神汁を始めとした料理でおもてなしを致します。

・市民風車コース

2003年に鱒ヶ沢町に建設された全国二例目の市民風力発電所「市民風車わんず」を見学していただきます。また、官地民木の形態で近年まで保護されてきた場所(ミニ白神)を、約1時間半トレッキング体験します。地元の方によるガイド付きです。

■シンポジウムについて

テーマ「環境創造のダイナミズム」(仮)

鱒ヶ沢町を舞台に活動する二つのNPOは、自立的な事業を展開しながら地域に刺激を与えています。彼らは風力や体験型観光という新たな資源を利用しつつも、それを都市住民との交流や一次製品の販売などにも結びつけようとしています。その結果、これまで地元地域に存在してきた資源や人材にも新たな価値が見いだされています。

こうした取り組みは「コミュニティービジネス」や「社会的起業」として総括される場合もありますが、予定調和的に何か生まれてきているわけではありません。多様な価値が共存可能な仕組みを通じて、多様な主体の満足を目指す過程は確認できるでしょう。けれども、そこへの期待がある一方で、多様化に伴う混乱や戸惑いも存在するはずで、活動を展開するNPOと地元地域の方々の言葉が交錯する中から、まずはそのダイナミズムを垣間見たいと思います。

こうした流動的な現実には、環境社会学に対する挑戦ともいえます。人々が自然に新たな価値を見だし、そのことが環境の意味を変化させ、さらには人のつながり方も変化しています。こうした連続的・連動的な変化を捉える枠組みを見だし、環境社会学の新たな役割を確認する機会にしたいと考えています。

司会 関 礼子 (立教大学)

パネラー (いずれも予定)

加藤 隆之 (鱒ヶ沢町役場 企画課)

木村 才樹 (白神アグリサービス)

永井 雄人 (白神自然学校一ツ森校)

三上 亨 (グリーンエネルギー青森)

丸山 康司 (産業技術総合研究所)

■自由報告

◆A会場

A-1. 中国の環境NGOと環境政策にみる「草の根」化

相川 泰 (鳥取環境大学)

A-2. 抗議運動における参加動機の構造—高レベル放射性廃棄物をめぐる闘争から—

青木 聡子 (東北大学)

A-3. 「豊島」内部における認識の分裂構造—豊島産業廃棄物不法投棄事件から—

藤本 延啓 (九州大学)

- A-4. ポスト公共事業社会における当事者—ダム建設問題の合意形成過程を事例として—
葛西映史子 (関西学院大学)
- A-5. 環境保全条例の制度化に関わる地域社会の戸惑い—「環境」をめぐる支配の関係性のなかに埋没する合意形成—
土屋雄一郎 (関西学院大学)

◆ B会場

- B-1. マタギの幻想と現実<序論>—北東北のフィールドから—
山下祐介 (弘前大学)
- B-2. 環境社会学から自然災害へのアプローチ試論—「近代知の失敗」とその修復実践研究から—
嘉田由紀子 (京都精華大学, 琵琶湖博物館)
- B-3. 生業戦略の変遷と地域資源の位置づけ—宮城県・北上川河口地域のヨシ原を事例として—
平川全機・宮内泰介・黒田暁 (以上, 北海道大学)・金菱清 (東北学院大学)・細川貴史・武中桂 (以上, 北海道大学)
- B-4. 不徹底なかかわりが維持する半自然のあり方—宮城県・北上川河口地域のヨシ原を事例として—
黒田暁・宮内泰介・平川全機 (以上, 北海道大学)・金菱清 (東北学院大学)・細川貴史・武中桂 (以上, 北海道大学)
- B-5. 河川利用の権利の正統性はどうか立ち現れ持続してきたか—宮城県・北上川河口地域のヨシ原を事例として—
宮内泰介・平川全機・黒田暁 (以上, 北海道大学)・金菱清 (東北学院大学)・細川貴史・武中桂 (以上, 北海道大学)

◆ C会場

- C-1. 『婦人之友』読者組織である『全国友の会』にみる「家庭生活の合理化」の変遷—昭和から平成にかけて70年間の活動のあゆみ—
樋口幸永 (滋賀県立大学)
- C-2. 映画が人々の環境認識に与える影響について
青柳みどり (国立環境研究所)
- C-3. 水資源制度改革による地域の社会と環境への影響
中島正博 (広島市立大学)
- C-4. 景観保全をめぐる法政策に関する一考察—人と景観とのかかわりを軸に—
岩崎亜希 (三菱総合研究所)
- C-5. 環境政策と国際条約—オース条約を事例として—
奥野 真敏 (成蹊大学, オーフス・ネット・ジャパン国際制度部会)

【第31回セミナー事務局】

丸山 康司 (事務局長) 柏谷 至 山下 祐介 湯浅 陽一 竹内 健悟 鬼頭 秀一 土屋 俊幸

■ 問い合わせ先

丸山 康司 (産業技術総合研究所 エネルギー技術研究部門)
〒305-8564 つくば市並木 1-2-1
電話 029-861-7150
電子メール maruyama.yasushi@aist.go.jp

2 特別研究例会「修士論文発表会」の報告

2-1. プログラム再掲

■日時：2005年3月12日（土）13：00～17：00

■場所：法政大学市ヶ谷キャンパス
大学院棟（92年館）4階・401教室

企画担当＝池田 寛二（法政大学）＋大倉 季久（法政大学大学院）

◇13：00 企画担当者挨拶（池田 寛二）

■第1部 13：10～15：20（司会者 関 礼子）

1. 島根県江の川流域における漁業活動と漁場利用をめぐる地先慣行 手塚 佳介氏（筑波大学）
2. 環境保全における住民運動の役割：西宮甲子園浜埋立公害反対運動の展開過程を事例に 林 昌宏氏（神戸大学）
3. 環境運動における戦略的パターンリズムの可能性：韓国大邱市三徳洞のマウルづくりを事例として松井 理恵氏（筑波大学）

◇15：20～15：35 休憩

■第2部 15：35～17：00（司会者 池田 寛二）

4. 日本国家は環境NGOにどのような政策枠組みを提示してきたか？（Japanische Umwelt-NGOs als Adressaten staatlichen Handelns）ブルックシュ・ズザンネ氏（専修大学）
5. 飯島伸子における「公害問題」への視座：「環境問題」の再検討にむけて 友澤 悠季氏（京都大学）

◇17：00 全体の講評＋事務局からの連絡

■第3部 懇親会

2-2. 司会者からの報告

第1部について 関 礼子（立教大学）

4回目となる2005年度修士論文発表会では、入念に準備された5報告をめぐる、活発な意見交換がなされた。私が司会を努めさせていただいた3報告についての印象とコメントを以下に記し、修士論文報告会の報告に代えたい。

手塚佳介氏の報告は、綿密なフィールド調査に基づいて漁場利用における地先慣行を明らかにし、それが社会関係の強化や資源獲得をめぐる紛争の回避に結びつくことを明らかにした。コモンズ管理が、資源の持続というよりはむしろムラの持続をもたらすという視点を示唆する本報告は、水産資源管理をめぐる近年の議論との対比で興味深く思った。ただし、報告は漁業活動や地先慣行の詳細に多く時間を割き、社会関係の強化や紛争回避に関しては不十分な感があった。欲をいえば、短い報告時間では割愛せざるを得なかった地域の社会構造やコモンズの定義について、補助資料を提示するなどの工夫が欲しかった。

林昌宏氏は、海浜埋立反対運動の経緯を丹念に追いかけて、公害防止のためにはじめた運動が自然保護運動の側面を取り入れたこと、提訴された訴訟が法的に正者、政策提言者などの役割を持ったことなどを報告した。残念なのは、本事例が他の環境社会学研究にいかにか貢献しうかがいまひとつ明確に提示されなかったことである。素材としての事例を料理する道具を複数持つこと、たとえば社会運動論の研究蓄積や、近年のエンパワーメントに関する議論などにめくばりするなどを、今後の研究を豊富化するうえで期待したい。

松井理恵氏は、韓国のマウルづくりというコミュニティ形成運動を事例に、住民主導の地域づくりに成果をあげるのは、ボランティアの動員ではなく、住民の日常に定礎した「つきあい関係の動員」であることを論じた。他者と容易に代替しうるボランティアではなく、他者と交換不可能な役割を持つ「あの人（たとえば料理

上手なあの人)」を動員することが、「ともに」運動をつくることにつながったという視点は面白い。とはいえ、こうした事例分析が、分析視覚として提示された理論枠組、特に「公論形成の場」に関する諸議論と十分に接合していたか否かは疑問の余地がある。ある事柄をめぐる賛否が分かれている「問題状況」を分析する理論を、本事例で扱う意味については、もう少し丁寧かつ説得的な説明が必要かと思う。

全体としてみると、今回の3報告は、荒削りな点もみられたが、それぞれに環境社会学の次世代を担ってゆくだろう若き研究者としての「きらめき」を強く感じる報告であった。これからの3氏の飛躍におおいに期待したい。

第2部について 池田 寛二 (法政大学)

今回の修士論文発表会は報告の数こそ5つと少なかったが、いずれも内容的には大変に充実したものであった。年度末のあわただしい時期にもかかわらず、35名の参加を得て、熱心な、そして時折は刺激的な質疑応答がくりひろげられた。5つの報告のうち、前半の3つはいずれも事例研究にもとづく報告であり、その点では、オーソドックスなスタイルの環境社会的な研究成果であった。それに対して、後半の2つの報告は、環境社会学の修士論文の一般的傾向からすれば、かなり異例な研究成果であった。「異例」というのは、まず第4報告の場合、外国人による日本の環境政策の研究が修士論文発表会で報告されたのは初めてだったからである。そして、第5報告の場合、「環境社会学の歴史社会学」とでも言うべき斬新な視角からの研究成果だったからである。前半の3報告については、司会の労をおとりいただいた関礼子氏からコメントが寄せられているので、ここでは、私自身が司会した後半の2報告についてのみ、所感を述べさせていただくことにする。

環境政策の国際化が急速に進みつつある今、日本の環境政策も国際的な視野から検討しなおす必要性がますます高まっている。そういう意味で、ドイツの日本研究者が近年の日本の環境政策の動向をどのようにとらえているかを示してくださったブルックシュ・ズザンネさんの報告は興味深いものであった。報告では、近年の日本の環境政策において、国家（政府）と環境NGOとの関係性がいかに変容しつつあるかに焦点を当て、両者の協働が徐々に促進されようとしている点を評価しながらも、日本のNGOにはまだ政策の革新に正統性(legitimacy)を付与する機能が十分に具わっていないという分析が示された。ただそれは、ドイツより日本の方が遅れているという見方ではなく、程度の差でしかないという見方であり、むしろ、両国とも同様に環境の「協働型国家管理」に向けて環境政策のレジームが移行しつつあるという見方に立つ分析であった。ドイツやEUとの比較が必ずしも十分に行われなかったのはいささか残念であったが、国際比較を通じて共通の問題を発見してゆくことの重要性が示唆されたことには大きな意義があったと思われる。

さて、環境社会学会は、正式に設立されてからだけでもすでに10年を超え、会員数も700人に達している。だが、その間に、環境社会学の問題関心領域が狭く限定されたり、借り物の理論フレームばかりが無批判に使いまわされるような、いわば閉塞的な状況が生まれつつあるのも事実だと思われる。そういう意味で、戦後日本における「環境問題」という問題領域の歴史的な生成過程に立ち戻り、その渦中で環境社会学のひとりのパイオニアとしての飯島伸子氏が、「公害」という問題領域が「環境破壊」とか「環境問題」という普遍的な言説空間に取り込まれて矮小化されることに最後まで強い違和感を抱き続けていたことを明らかにし、それを通して、環境社会学が本来めざすべき方向を根本から再考する契機を与えてくださった友澤悠季さんの報告は、きわめて意義深い問題提起であった。とりわけ、飯島が公害問題の「被害-加害構造」論によって明らかにしたのは、被害者の敵は加害者ではなく「格差」であったということであり、公害問題の解決は「格差そのものを打破してゆく作業」であり、それは「民主主義という方向を突き詰めることによって」のみ可能になると考えていたという指摘は、今日の環境社会学の閉塞状況を克服するためのひとつの突破口を示唆する主張として重く受けとめねばならないと思う。

2-3. 参加者から

大倉 季久（法政大学大学院）

3月12日、修士論文発表会が開かれた。4回目の開催となった今年も、例年同様の力作が5本並んだ。自分自身、裏方の仕事をこなしながらの参加となったこともあり、すべての報告を聞くことは残念ながらできなかったが、そのなかでもとくに、いずれも1970年代の住民運動と研究者の実践に着目した2つの報告（第2報告と第5報告）からは、日頃の研究を意識的に振り返る有益な機会を得た。注目すべきは、報告に描かれた当事者の公害、あるいは環境（環境問題、環境保全など）という語の使われ方だ。

一方は、浜の埋め立てをめぐる行政と激しく対立した住民が、「公害」あるいは「環境」というタームを戦略的に使いながら抗議し、問題提起を繰り返していた様子が、他方は、公害問題から環境問題へ、支配的な言説の移行が、研究者の言説を制約し、結果的に公害問題と環境問題という、「別々の文脈を辿ってきた問題系が半ば強引に接合され」ていく流れが克明に描かれていた。つまり、住民も、研究者も、公害問題でも環境問題でも語り尽くすことのできない問題の所在を自覚しつつも、両者を使い分けていたと思われるのである。この事実は、環境問題と公害問題とを明確に区分して用いている（と思いついでいる）われわれにとっては、ただ時代の変わり目にありがちな錯綜した状況を示す事態として片づけることなどできない、むしろ、研究戦略上、つねに意識していなければならない注意点を想起させる。

今日、生活環境の改変をめぐる深刻な対立を経験している現場では、改変に抗議する人びとは、環境を保護せよ、保全せよ、と口を揃えて訴える。物理的な環境の変化がひとつの争点となっていることに違いないのだが、だからといって、上記の事実を思い返せば、例えばこれを「環境運動」と捉えることが、必ずしも抗議運動に加わる人びとの問題関心の全体像を捉えているわけではないこと、そればかりか、かえって研究主体の問題把握を制約してしまう可能性があることに、つねに慎重でありたいと思う。こうしたことを意識せず、ただ表に出てくる言葉にだけ着目して、実践の展開を描き出そうとする限り、生み出される成果は、現実に環境の変化と苦闘している当事者の声が届かない、平板なものにとどまってしまう。そのようなことを、会が進むなかで改めて考えていた。

3 事務局より

3-1. 新入会員の紹介（2005年2月～2005年4月承認分の入会者6名、五十音順）

住所など詳細情報につきましては、次回の追加・訂正版会員名簿に掲載いたします。

- (院) 松井 理恵（まつい りえ）筑波大学大学院人文社会科学系研究科社会科学専攻 社会学分野 大学院生
 (正) 卯田宗平（うだ しゅうへい）中国・中央民族大学民族学社会学学院／日本学術振興会海外特別研究員
 (院) 尹 秀麗（いん しゅうれい）一橋大学社会学研究科 博士課程1年生
 (正) 南 有哲（みなみ ありさと）津市立三重短期大学法経科 教員
 (正) 黒田 末寿（くろだ すえひさ）滋賀県立大学人間文化学部 教授
 (正) 宗像 優（むなかた まさる）専修大学法学部 非常勤講師

3-2. 退会者

高橋眞司 宇戸純子 明神実枝 鈴木貢 阿部香里（04年度末）

本号作成は、学会事務局・平川全機（北海道大学大学院）が担当しました。

『環境社会学会ニュースレター』
第 37 号 (通号 42 号)
発行日：2005 年 4 月 28 日

●
JAES Newsletter
No.37
April 28, 2005

●
編集・発行：環境社会学会事務局
〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目
北海道大学大学院文学研究科 宮内泰介研究室内
Fax：011-706-4150
E-mail：kankyo@reg.let.hokudai.ac.jp
郵便振替口座：00530-8-4016
口座名：環境社会学会
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jses3/>
